

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2004 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	観光学	研究科	観光学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	観光学部		村上 和夫 印		
自然・人文の別	自然	<input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	共同 名
研究課題	観光を通じた旅行目的地に対する個人の地理的イメージ（場所）の形成に関する研究				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	観光学研究科観光学専攻 博士課程後期課程2年		安江 枝里子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2004 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、観光地の構成要素である観光者による、観光地（旅行目的地）の地理的イメージ（風景）の表象を研究対象とするものである。観光者個人の旅行経験に基づき言語によって表象された風景の構造について、談話分析を用いて把握を試みた。

具体的には、旅行経験に基づく観光者の風景に関する談話の内部構造を把握すると同時に、旅行記による風景の描写における語り手（書き手）としての観光者の視点の特徴を検討した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 観光者 ] [ 地理的イメージ (風景) ] [ 談話分析 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、① 観光者の談話（話し言葉）にみる風景表象の構造、② 旅行記よりみる語り手としての観光者の視点 の2点から研究成果の報告をおこなう。筆者は、本助成金を通じて、以下の2点の項目に関して主に文献収集および調査を実施した。

## ① 観光者の談話（話し言葉）にみる風景表象の構造

ここでは、観光者の話し言葉によって表現された旅行目的地の風景描写に焦点をあて、日本語文法論、とくに時間表現の機能をもつアスペクト（相 Aspect）とテンス（時制 Tense）の観点から、旅行経験を通じた風景談話の空間構造を明らかにした。

調査の手続きは以下のとおりである。まず、旅行から帰ってきた観光者を対象に任意のテーマのもとにインタビューを行った。インタビューは録音されすべて文字起こしが行われた。分析対象としたのは、特に語り手が景色について語った部分とし、その談話内において、アスペクトが使用されている箇所とテンスが使用されている箇所を抽出し、談話内の時間の流れに沿って風景要素の整理を行った。アスペクトとは、通常「○○をしている／していた」というような表現のことを指し、ある時間の流れにおいて、一時点ではなく、一定の時間の幅を表現することを可能とさせるものである。

その結果、テンスが使用されることによって、まず、談話内の時間の流れを区切られ、さらにアスペクトを使用されることによって、区切られた時間のポイントとポイントの間に重層性をもつ内的な空間が作り出されることが明らかになった。テンスは「する／した」という表現をもちいることによって、時間の流れを区切ることを可能とする。一方「している／していた」というアスペクトは、テンスによって時間の流れが区切られる時に、そこに複数の出来事や要素を同時に存在させる内的な空間を作りだしている。アスペクト、テンスのこれらの機能によって、語り手が複数の出来事や風景の要素をあたかも同時に存在しているかのように表現することが可能となることが確認された。アスペクトによって作られた3次元の空間性のなかに観光者によって風景の要素が自由に配置される。加えて、この風景の要素の同時性を可能とする空間によって、平面的な風景描写ではなく、絵画における遠近法のような奥行きのある複雑な風景像を聞き手に伝える可能性をもつことが示唆された。

## ② 旅行記よりみる語り手としての観光者の視点

② では、文として語られる風景における視点の問題を、物理的な視覚位置の問題としてではなく、語りとして描写する際の視点、すなわち語り手としての観光者の視点としてとらえ直し、旅行記を対象としその特徴を検討した。

まず、言語（ここでは書き言葉を指す）による風景の描写においては、書き手の視点が読み手によって再構成されることを指摘し、旅行記においても読み手に風景への視点が存在することを指摘した。

旅行記の書き手の視点の特徴としては以下のことが指摘された。書き手の観光者は非日常の世界にいるが、読み手は日常の世界に存在するため、必然的に旅行エッセイの書き手の視点は、日常世界にいる読み手が想像しうる範囲の、奇抜すぎないものでなければならないことである。一方、観光者であった書き手は、記述しようとする観光経験や知識において、論理上読み手より一歩先に位置する存在である。したがって観光者であった書き手の視点の独創性は、観光に関連する新しい知識や経験を得ている書き手の、読み手に対する差異によって与えられることが指摘された。

本論文では、以上の観光者であった書き手の特徴をふまえ、実際の旅行記を用いて事例研究を行った。対象としたのは、椎名誠による「零下二〇度の雪原で三つの月を見た。」と「夜なのに林のむこうからおはやしきがきこえてきた。」（両方とも『風の道 雲の旅』、2004、集英社 所収）である。前者のエッセイでは、旅行記の視点の独創性について検証を行った。エッセイのなかであるシーンが描かれているが、そこで登場した要素は、

**研究成果の概要 つづき**

「生まれたばかりの羊」「ゲル」「(羊の) 群れ」などであり、椎名が訪れたモンゴルの遊牧民にとっては、奇抜なものではないが、読み手として想定される日本人にとっては、想像しうる範囲の非日常性をもつものであることが確認された。

さらに二つ目の旅行記では、語り手の俯瞰的な視野について言及を行った。記述の中で確認されたのは、語り手が鳥のような、あたかの地図の上から地上を見下ろすような視点で風景が描写されていることである。エッセイのなかにおいては登場人物の低い、あたかも見えているものをそのまま書き綴っているかのような視点が存在すると同時に、読み手が風景を再構成する上で合理的な範囲での俯瞰的な視野も存在していることが明らかになった。

以上のことより、旅行記における風景の描写には2つの視点が存在することが多く、第一は主人公(観光者)の視点であり、第二は主人公が旅行経験を通じて関わったモノの位置を示す俯瞰的で地図的な視点である。これらの視点は、旅行記に書かれている風景を読者が再構成できるように配置されており、視点の位置に一定の限界を設けていることがうかがわれる。第一の視点に対しては、日常との対比で非日常を理解できる範囲、第二の視点に対しては日常行動で通常利用する地図の縮尺の範囲を限界としていることである。

この2つの視点のうち、第一の視点は文化論的あるいは社会学的背景を持った視点である可能性が高い。それはこの視点からの風景の視野が観光者の「まなざし」の議論と結びつく可能性があるからである。もちろん、第二の視点も主人公の位置を確定するための地図の要素の選択に文化論的、社会学的背景の影響が現れる可能性は高い。しかしそれは位置を巡る説明要素ではなく、主人公の属性を説明する要素として機能すると考えられるため、二義的とみなすことが妥当である。